

[特別支援教育]

小学校特別支援学級におけるスヌーズレン教育の意義

－交流及び共同学習に発展させた取組－

梅澤 京子*

1 はじめに

3年前の上越教育大学学校教育実践研究センターのスヌーズレンルームとの出会いをきっかけに、特別支援学級でスヌーズレン活動に取り組んできた。日本のスヌーズレン教育の先駆者である常葉大学教授の姉崎氏(2013)は、「スヌーズレン教育とは、教室内を暗幕などで薄暗くし、対象児の好む光や音(音楽)、香りなどの感覚刺激を用いた多重感覚環境を教室内に設定して、その中で感覚刺激を媒介とした教室と対象児、および対象児同士が相互に共感し合い、心地よさや幸福感をもたらすことで、対象児のもつ教育的ニーズ(発達課題)のある感覚面や情緒面、運動面、コミュニケーション面などにおける心身の発達を促し支援する教育活動である」と定義している¹⁾。

スヌーズレンルームでは、子どもたちが素直に自己を表出し、自主的に人とかかわろうとする姿が見られた。このことから、自立活動の目標である心身の調和的発達を培う可能性があると考え、自校化を試みて2年目となった。特別支援学級の自立活動に位置付けた活動を全校児童の活動として広げる過程の中で、新しい「交流及び共同学習」として発展させてきた。日本スヌーズレン総合研究所の研修会やスウェーデンのスヌーズレンを日本に紹介した河本佳子氏の著書^{2) 3)}、上越教育大学の渡辺径子氏の実践を参考に、スヌーズレンルームの理念や歴史、部屋の構築や利用方法を学び、子どもたちと共に活動に工夫を重ね、自校化を図ってきた。

「スヌーズレンの理念は、障害のある人の障害の種類や程度を問わず、さまざまな障害のある人が活動できる。さらに障害がある人だけでなく、幼児や成人、高齢者までも幅広い人にも活用できるもの」と国立特別支援教育総合研究所の報告がある⁴⁾。日本のスヌーズレン教育の実践は、主に重度・重複障害児を対象に行われ⁵⁾、特別支援学校⁶⁾や小学校特別支援学級⁷⁾、通級指導教室⁸⁾での主に個別指導での実践例が公開され、心理的な安定と学習や生活への意欲が向上したという結果を得ている。これらの実績や動向を踏まえ、自校の特別支援学級児童の自立活動にスヌーズレン活動を取り入れ、さらに、交流学級児童との交流及び共同学習⁹⁾へと発展させることで、児童の自立活動の個別の目標¹⁰⁾の達成を目指してきた。

これまでの活動を振り返り、自立活動の視点からスヌーズレン活動の教育的価値を検討し、新たな教育活動としてのスヌーズレン教育の意義を追究していく。

2 研究の目的

特別支援学級の自立活動でスヌーズレン活動を行い、交流及び共同学習へと広がる過程と児童の活動内容と自立活動の内容との関連を整理し、スヌーズレン教育の意義を探る。

3 研究の方法

(1) 対象 上越市内A小学校 特別支援学級児童

(2) 期間 平成30年5月～令和2年9月

(3) 方法

① スヌーズレンルームを特別支援学級教室に設置し(写真1)、児童と支援者(教師)と環境の三項関係を大切にしながら、児童の自主的な言葉や行動に寄り添うスヌーズレン活動を行う。

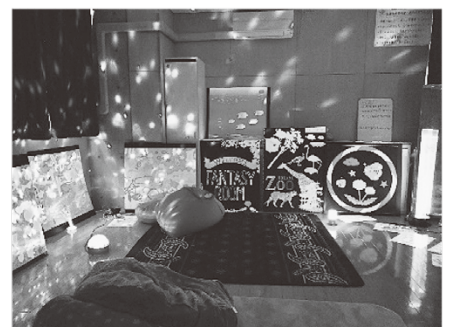


写真1 スヌーズレンルーム内の様子

*上越市立大町小学校

- ② 特別支援学級の自立活動にスノーズレン活動を取り入れ、スノーズレンルームで光や香りを味わい、スノーズレンルームに飾るアート作品を作る。
- ③ 全校児童に紹介し、交流及び共同学習を行う。
- ④ 全校児童に週2回ロングの昼休みにスノーズレンルームを開放する。人数とメンバーを決めた体験（10分間）、人数とメンバーを決めた利用（30分間）、学年フリーでの利用（30分間）と段階的に行う。

(4) 検証方法

- ① 特別支援学級のスノーズレン活動と自立活動の内容との関連付けを分析する。
- ② 特別支援学級抽出児童の選択肢アンケートの回答と自立活動の内容との関連付けを分析する。

4 実践の概要

(1) 特別支援学級の概要

A小学校の特別支援学級は、知的障害、自閉症・情緒障害、病弱の3学級が設置され、全8名の児童が在籍している。教育課程は、国語と算数、自立活動と生活単元学習・総合的な学習の時間を特別支援学級で、他の教科は交流学級で学習している。知的障害特別支援学級は生活単元学習、自閉症・情緒障害特別支援学級と病弱学級は総合的な学習の時間として、「Wタイム」を設定している。「Wタイム」は週1単位時間、自立活動の内容をベースに、交流活動、栽培・飼育活動、スノーズレン活動を行っている。交流学級では、その他の教科、総合的な学習の時間、道徳、特別活動を個に応じた支援をしながら行っている。日常的な交流及び共同学習では、学力の定着と学習スキルや友達とのかかわりなどの社会性をつけることをねらいとしている。学年が進むにつれて、学習面や生活面ともに支援の必要性が多くなっているのが現状であり、課題でもある。特別支援学級児童抽出児3名の主な実態と自立活動の目標を表1に示した。

表1 抽出児童の実態と目標

児童	実態	自立活動の目標
B子 ----- 4年女子	交流学級では友達と協力して学習に参加している。 言葉遣いが荒く、一方的なかかわりになることがある。	相手の気持ちを考えながら、自分の思いを適切な言葉で伝える。
C子 ----- 5年女子	誘われれば素直に応じることができる。 気持ちを人前で表すことが苦手で、友達関係を積み上げることが難しい。	友達や先生に自分の思いを伝える。
D男 ----- 5年男子	集団の中で学習に参加しようとしている。 一斉指示や友達の話を理解することが難しい。素直に支援を受け入れないことがある。	友達や先生の話素直に聞いたり、分からないときは尋ねたりする。

(2) 活動記録

約3年間の活動を大きく4つの内容に分類し、時系列での活動の展開を図1に示した。活動を時間の流れに沿って整理すると、学校教育実践研究センターの訪問・体験から始まり、2年目の途中から自分たちが作ったスノーズレンルームでの活動や飾りを創作（創作活動）し、他者への紹介（文化祭展示）と全校の友達への紹介、交流活動へ階段のように行動も気持ちも積み重なるように広げてきた。児童にとって、活動の目的だったスノーズレンルームでの活動がルーム作りや友達との交流を目的とした環境と変化していった。

			交流活動
	紹介活動		
訪問・体験		創作活動	
平成30年度	令和元年度	令和2年度	

図1 活動の展開

平成30年度は、学校教育実践研究センターのスノーズレンルームの「訪問・体験」と文化祭での「紹介活動」を行った。訪問・体験では、ブラックルームで蛍光ペンで絵を描いたり、蛍光の折り紙やカードゲームをしたりし、ホワイトルームで影絵を写したり、プロジェクタに写った宇宙の映像でお話づくりをしたりした。1か所に留まるというより、いろいろな場所を探索しながら過ごす児童が多かった。新しいことを試したり、自分から友達や先生とかわたりする姿も見られた。回を重ねるうちに「今日は〇〇をしたい。」と目的意識をもって活動に参加していた。文化祭に紹介するための創作活動では、ハーバリウムづくりと蛍光塗料での絵画の作成をした。創作した作品をスノーズレンルームに置いて光ることを確認できると、さらに作品作りや自分たちのオリジナルのスノーズレンルームを創ろうという意欲につながった。

令和元年度は、実践センターの「訪問・体験」から始まり、「創作活動」「紹介活動」そして、「交流活動」まで広げた。常設置の取り組みとしての「創作活動」では、諸感覚を使ってカーペットやクッションの肌ざわり、バブルタ

ワーやミラーボールの光、アロマの香り、オルゴールのBGMなどの活動を創る活動を行った。友達や先生に自分から働きかける様子や素の自分を出して話をする様子が多く見られ、活動を楽しんでいた。常設に伴い、交流学級児童が興味をもち始め、特別支援学級児童が質問を受けることで、自然と「全校の友達に紹介したい」「一緒に楽しみたい」と思うようになった。全校児童に全校朝会で紹介するための準備活動、全学年の友達に体験をしてもらう交流活動を行った。どんな紹介をしたらいいかをみんなで相談し、ポスターや看板づくりを行った。全校朝会では、自作のポスターや看板を持って、堂々とスヌーズレンルームのよさを紹介していた。たつぷりとスヌーズレン活動を行ってきたことが自信につながっていた。その後、全学年の交流学級の学級活動に5～6人のグループで10分～15分で体験できるように設定した。何をどのように紹介したらいいかを自分たちで考え、準備活動をした。相手の反応を見ながら臨機応変に対応している様子もあった。交流学級の友達と一緒にスヌーズレン活動を楽しんだり、用具を用意したり、タイマーを見て「あと〇分です」と合図をしたり、自分のできることを一生懸命やろうとする姿が見られた。友達が歓喜して楽しんでいる様子を見て、「みんなに楽しんでもらえてよかった」と達成感を感じていた。1学期の体験をもとに、学年のスヌーズレン活動を行った。2学期は、各学年5回ずつ、1回に5人～8人のグループで活動した。

令和2年度は、新型コロナウイルスの感染拡大予防対応で休校となり活動が中断したが、5月中旬から特別支援学級でのスヌーズレン活動を再開した。緊急事態宣言が解除された6月下旬から交流学級児童との交流活動を再開した。学年フリーで換気や消毒、マスク着用など、3密に配慮しながら行った。1年生は初めてなので、部屋の説明と15分間の体験からスタートした。部屋の中では、器材の名前を紹介したり、お絵かきや3Dメガネなどの活動をやって見せたりした。歓声を上げて反応する1年生に笑顔で優しく声をかける様子が多く見られた。2年生以上の児童は、3か月ぶりということもあり、多くの児童が来室し、楽しみにしていたことが伺えた。光、におい、BGMなどの刺激を楽しみ、友達と活発にかかわる姿やクッションに横たわり静かに光を見つめている様子も見られた。

5 研究の結果と考察

(1) 特別支援学級児童の活動記録の分析と考察

活動内容と自立活動の内容との関連を表2に示した。福島県特別支援教育センターが作成した小・中学校における特別支援学級（知的障害、情緒障害）向けの自立活動の指導のための早見表¹¹を参考に、活動内容を自立活動の内容に分類し、関連を整理した。

訪問・体験活動では、「健康の保持」の「(1)生活習慣の形成」、 「心理的な安定」の「(1)情緒の安定」「(2)状況の理解と変化への対応」、 「人間関係の形成」の「(1)他者とのかかわり」、 「環境の把握」の「(1)保有する感覚の活用」、 「コミュニケーション」の「(1)コミュニケーションの基礎的能力」の内容と関連している。いろいろな遊びを探索しながら試している場面では、保有する諸感覚を最大限に活用している姿が見られ、かつスヌーズレンルームという場所の理解や自分の過ごしを模索している姿が見られた。次第にリラックスしていく様子、友達や教師とかかわろうとする姿から、気持ちが安定し、人とかかわりやコミュニケーションの力を高めることにつながっていることが伺える。

創作活動では、「健康の保持」の「(4)生活環境調整」、 「心理的な安定」の「(2)状況の理解と変化への対応」、 「人間関係の形成」の「(2)他者の意図、感情の理解」、 「環境の把握」の「(1)保有する感覚の活用」「(4)感覚を総合的に活用した周囲の状況の把握と状況に応じた行動」、 「身体の動き」の「(5)作業に必要な動作と円滑な遂行」、 「コミュニケーション」の「(1)コミュニケーションの基礎的能力」の内容と関連している。校内のスヌーズレンルームでいろいろな遊びを工夫している姿は自らの生活環境をよりよく調整していく力をつけることにもつながる。また、新しい飾りを作る活動では、試行錯誤しながら、手先の器用さ、巧緻性を高めることにつながる。

紹介活動では、「健康の保持」の「(4)生活環境調整」、 「心理的な安定」の「(2)状況の理解と変化への対応」、 「人間関係の形成」の「(1)他者とのかかわり」「(2)他者の意図、感情の理解」「(3)自己理解、行動の調整」、 「身体の動き」の「(5)作業に必要な動作と円滑な遂行」、 「コミュニケーション」の「(1)コミュニケーションの基礎的能力」の内容と関連している。友達と一緒に飾りを作る活動や文化祭で多くの人に紹介する活動を通して、友達がどんなことを楽しみにしているかを考え、楽しませたいと思ったり、自分だったらどんなふうに楽しむかを考えたりすることが、他者の意図や感情を理解し、自己理解、行動を調整しようとする力を育成することができる。

交流活動では、「健康の保持」の「(4)生活環境調整」、 「心理的な安定」の「(3)障害上の困難を改善、克服する意欲」、 「人間関係の形成」の「(1)他者とのかかわり」「(2)他者の意図、感情の理解」「(3)自己理解、行動の調整」「(4)集

表2 活動段階と自立活動の項目

活動段階	主な活動	活動内容	自立活動の内容					自立活動の項目	
			健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き		コミュニケーション
訪問・体験	蛍光のカード遊び 蛍光ペンのお絵かき 3Dメガネ テント ボールプール クッション 香り 光 お話づくり 影絵	いろいろな遊びを試す 探索する		(2)		(1)		心理的な安定 (2) 状況の理解と変化への対応 環境の把握 (1) 保有する感覚の活用	
		諸感覚を使って遊ぶ	(1)	(1)		(1)		健康の保持 (1) 生活習慣の形成 心理的な安定 (1) 情緒の安定 環境の把握 (1) 保有する感覚の活用	
		友達を誘って遊ぶ			(1)		(1)	人間関係の形成 (1) 他者とのかかわり コミュニケーション (1) コミュニケーションの基礎的能力	
創作活動	蛍光カード遊び 蛍光ペンのお絵かき 3Dメガネ 光 お話づくり ごっこ遊び カーペット・クッション	いろいろな遊びを試す 探索する	(4)	(2)	(2)	(1)	(1)	健康の保持 (4) 障害特性理解と生活環境調整 心理的な安定 (2) 状況の理解と変化への対応 人間関係の形成 (2) 他者の意図、感情の理解 環境の把握 (1) 保有する感覚の活用 コミュニケーション (1) コミュニケーションの基礎的能力	
		友達と新しい遊びを試す		(2)	(2)	(4)	(1)	心理的な安定 (2) 状況の理解と変化への対応 人間関係の形成 (2) 他者の意図、感情の理解 環境の把握 (4) 感覚を総合的に活用した周囲の状況の把握と状況に応じた行動 コミュニケーション (1) コミュニケーションの基礎的能力	
		新しい飾りを作る				(4)	(5)	環境の把握 (4) 感覚を総合的に活用した周囲の状況の把握と状況に応じた行動 身体の動き (5) 作業に必要な動作と円滑な遂行に関すること	
紹介活動	蛍光絵の具でお絵かき 共同作品 ハーバリウム ディスプレイアート	新しい飾りを作る	(4)	(2)			(5)	健康の保持 (4) 障害特性理解と生活環境調整 心理的な安定 (2) 状況の理解と変化への対応 身体の動き (5) 作業に必要な動作と円滑な遂行に関すること	
		友達と新しい飾りを作る			(2) (3)		(5)	(1)	人間関係の形成 (2) 他者の意図、感情の理解 (3) 自己理解、行動の調整 身体の動き (5) 作業に必要な動作と円滑な遂行に関すること コミュニケーション (1) コミュニケーションの基礎的能力
		いろいろな人に楽しさを伝える			(1) (2) (3)			(1)	人間関係の形成 (1) 他者とのかかわり (2) 他者の意図、感情の理解 (3) 自己理解、行動の調整 コミュニケーション (1) コミュニケーションの基礎的能力
交流活動	ポスター作り 看板作り 全校朝会で発表 交流学級の友達に紹介 一緒に活動	友達に楽しさを伝える			(1) (2) (3)			(1)	人間関係の形成 (1) 他者とのかかわり (2) 他者の意図、感情の理解 (3) 自己理解、行動の調整 コミュニケーション (1) コミュニケーションの基礎的能力
		友達が楽しく過ごせるように準備をする		(3)	(4)	(4)		(5)	心理的な安定 (3) 障害上の困難を改善、克服する意欲 人間関係の形成 (4) 集団への参加の基礎 環境の把握 (4) 感覚を総合的に活用した周囲の状況の把握と状況に応じた行動 コミュニケーション (5) 状況に応じたコミュニケーションに関すること
		友達と楽しく過ごす	(4)	(3)	(4)	(4)		(5)	健康の保持 (4) 障害特性理解と生活環境調整 心理的な安定 (3) 障害上の困難を改善、克服する意欲 人間関係の形成 (4) 集団への参加の基礎 環境の把握 (4) 感覚を総合的に活用した周囲の状況の把握と状況に応じた行動 コミュニケーション (5) 状況に応じたコミュニケーションに関すること

団への参加の基礎」,「環境の把握」の「(4)感覚を総合的に活用した周囲の状況の把握と状況に応じた行動」,「コミュニケーション」の「(1)コミュニケーションの基礎的能力」「(5)状況に応じたコミュニケーション」の内容と関連している。全校の友達への紹介や交流学級児童との交流及び共同学習が、交流学級への参加への意欲を促し、状況に応じたコミュニケーションの力を培い、さらに、活動の達成感、満足感が障害上の困難を改善、克服する意欲を高めることにつながっていると考える。

このことから、一連のスノーズレン活動が自立活動の6つの内容全てにおいて関連があることが分かった。特に、「創作活動」「紹介活動」「交流活動」の自校での活動は、全ての内容と関連が確認できた。

(2) 特別支援学級児童の振り返りの分析と考察

特別支援学級児童の振り返りは、児童の素直な感想や思いをなるべく的確に引き出すため選択肢アンケートを行った(図2)。アンケートの選択肢は、交流学級児童の振り返りカードの自由記述に書かれた言葉を用いた。抽出児童が選んだ言葉を自立活動の内容で整理し、表3に示した。アンケートは7月と9月に2回行い、2度選んだ言葉を太字で示した。また、アンケートの後にインタビューを行い、児童の思いを掘り下げるようにした。

3人に共通して「くつろげる」「ゆっくりできる」などの「健康の保持」,「楽しい」「心が落ち着く」などの「心理的な安定」,「クッション」「居心地がいい」などの「環境の把握」に関連した言葉を選んでいった。また、「友達と遊べる」「友達と一緒に楽しい」という2名の児童の記述から、「人間関係の形成」「コミュニケーション」に関連が見られた。

B子は、学年の一員として学年フリーの利用日に、ルームでの過ごしがにぎやかになった時、「小さな声で話をする」という約束があることを友達に自ら伝えていた。アンケートでも「さわがしい」「うるさい」というネガティブな捉えをしつつも、自分なりに友達とかかわろうとしている様子があった。また、クッションを取り合っている友達の様子を見て、「友達がクッションを必要としていること」を理解している発言も見られた。その後、特別支援学級の友達に「クッションを作りませんか」と提案し、Wタイムでクッション作りを行うことになった。「相手の気持ちを考え、自分の思いを適切な言葉で伝える」という目標に迫っていると言える。

C子は、普段から仲良くしている友達と学年フリーの利用日に蛍光ペンでのお絵かきを楽しんでいた。多くの友達とのかかわりはあまり見られなかったが、特別支援学級児童の友達と利用している時は積極的に「また、海賊ごっこをしよう」と提案し、自分から友達にかかわり、ストーリーを展開しながら、楽しそうに活動している姿が多く見られた。

スノーズレンルームに合うことばに○をつけましょう。

年 組 名 前 ()

たのしい ユニーク あそべる みんなとあそべる ともだちとあそべる さわがしい うるさい

きれい すてき うつくしい きもちいい まぶしい あかるい いいにおい いごちがいい

じゆう たいせつ クッション ねる ゆっくりできる ゆったり のんびり くつろげる

リラックス いやされる ストレスかいいょう すずしい くらい さむい あたたかい ひかる

えがかける すてき ふわふわ きらきら またきたい なんかいもきたい さいこう てんごく

休む いこいの場 しあわせ 心がおちつく カードができる 3Dメガネ てがみ

図2 選択肢アンケート

表3 抽出児童の振り返りと自立活動

抽出児	健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
B子 4年 女子	ねる ゆっくりできる リラックス ストレス解消 休む あそべる ゆったり くつろげる	楽しい いごちがいい 大切 ゆっくりできる ゆったり のんびり リラックス また来たい 何回も来たい 最高 天国 幸せ 心が落ち着く 気持ちいい	友達と遊べる みんなと遊べる	さわがしい うるさい 明るい いいにおい いごちがいい クッション すずしい さむい あたたかい ひかる きらきら カード		友達と遊べる みんなと遊べる
C子 5年 女子	ゆっくりできる くつろげる いやされる 休む	楽しい 幸せ いごちがいい ゆっくりできる 自由 最高 心が落ち着く		遊べる きれい いごちがいい クッション くつろげる 涼しい 光る ふわふわ		
D男 5年 男子	寝る ゆっくりできる のんびり くつろげる リラックス 癒される 休む ゆったり	楽しい いごちがいい 自由 ゆっくりできる のんびり ゆったり リラックス また来たい 最高 天国 幸せ 心が落ち着く	みんなと遊べる 友達と遊べる	きれい 気持ちいい まぶしい 明るい いごちがいい クッション くつろげる 涼しい 暗い 光る きらきら カード 3Dメガネ		みんなと遊べる 友達と遊べる

アンケートでは、友達とのかかわりの記述は見られないものの、少人数の規模の友達や教師との積極的なかかわりから、「友達や先生に自分の思いを伝える。」という目標に向かうきっかけになっていると言える。

D男は、他学年の学年フリーの日にも、器材のスイッチを入れたり、タイマーで時間を測ったり、友達が楽しく活動できるように気を配っていた。アンケートでは、自ら活動を楽しみ、友達と遊べることも楽しんでいる言葉を選択した。下学年の友達には、カードなどの使い方を伝えようとしたり、友達の話をも素直に受け入れたりしている様子が見られた。場面の状況に気分が左右されることが多いが、「友達や先生の話をも素直に聞いたり、分からないときは尋ねたりする。」という目標に少しずつ近づいていることが伺える。

これらのことから、3人共、スノーズレン活動を通して自立活動の目標にアプローチすることができた。スノーズレン活動が自立活動の目標を達成するための手立ての一つになっていると言える。

6 成果と課題

以上、小学校特別支援学級における3年間のスノーズレン活動の活動段階、抽出児童の活動の様子や振り返りと自立活動の内容との関連を整理、分析し、次の2点の教育的意義が明らかになった。1つ目は、スノーズレン活動は、自立活動の6つの内容である「健康の保持」「心理的な安定」「人間関係の調整」「環境の把握」「身体の動き」「コミュニケーション」の全てと関連しており、児童が主体的に自己の力を可能な限り発揮してよりよく生きていこうとする意欲を高め、心身の調和的発達を促す教育活動となるということである。特に、自校化し、常設されたスノーズレンルームで、自分たちの活動を満喫し、友達に紹介して、友達と交流及び共同学習をしていく過程の中で、自立活動の内容にも広がり効果が確認された。2つ目は、スノーズレン活動は、特別な支援が必要な児童の個別の目標を達成させるための手立ての一つとなるということである。1人1人の実態や課題に応じて、個々の心理的な安定から他者とのかかわりへ発展し、心身の調和的発達を促すことができるスノーズレン活動は、学校教育の中でのスノーズレン教育が価値あるものとして位置付けられると考える。

また、課題としては次のようなことが考えられる。スノーズレンルームでは、少人数での利用が前提となり、交流学級全体としての活動とすることが難しいこと、また、締め切った部屋での活動であり、パーソナルスペース、換気や消毒に十分配慮が必要となることである。コロナ禍の昨今、児童の安全管理には十分な配慮が必要となる。

交流学級児童にとっても、「体験」から「創作」「紹介」「交流」へ活動段階が広がり、それぞれの段階において、教育的な価値が成立することが想定される。上記の課題を常に念頭に置きながら、個々の児童のニーズに最大限に応えることのできるスノーズレンルームの在り方を考えていきたい。学校生活の中で、児童は、常に友達や教師とのかかわりの中で、自分の存在を確かめることで安心や自信を獲得し、新しいことへの不安や迷いを払拭し、チャレンジしていこうという意欲につながっていると考える。心身の休息やリラクゼーションだけではなく、友達や教師とのかかわりも含めて心身の調和的発達を促すスノーズレン教育の意義を今後も追究していく。

引用文献・参考文献

- 1) 姉崎弘 我が国におけるスノーズレン教育の導入の意義と展開 特殊教育学研究 2013年
- 2) 河本佳子 スノーズレンを利用しよう！－資格がなくても簡単にできる－ (株)新評論 2016年
- 3) 河本佳子 スウエーデンのスノーズレン－世界で活用されている障害者や高齢者のための環境設定法－ (株)新評論 2003年
- 4) 大崎博史, 石川政孝 教育相談におけるスノーズレンの活用－重度・重複障害のある子どもの主体性を尊重した環境づくり－ 2007年
- 5) ISNA日本スノーズレン総合研究所 スノーズレン教育・福祉研究 第3号 学術研究出版 2020年
- 6) 姉崎弘 スノーズレンの理論と実践方法－スノーズレン実践入門－ (株)大学教育出版 2019年
- 7) 前掲
- 8) 前掲
- 9) 文部科学省 交流及び共同学習のハンドブック 2018年
- 10) 文部科学省 特別支援学校学習指導要領 自立活動編 2019年
- 11) 福島県特別支援教育センター 自立活動の指導のための早見表